

国際教養大学長 中嶋 嶺雄 さん 75



信州人

学問の道 信濃教育が支え

1936年5月生まれ。東京外語大中国科卒、東大大学院修了。社会学博士。大学院在学中の64年、「現代中国論」を刊行。81年、文化大革命を批判的に分析した「北京烈烈」でサントリー学芸賞。東京外語大学長を経て2004年から国際教養大(秋田市)の理事長・学長。幼児音楽教育法のスズキ・メソッドで知られる才能教育研究会(本部・松本市)会長、松本深志高同窓会会長も務める。

くれた先生は、型破りでダンディーな人。浅間温泉の下宿を訪ね、夜な夜な人生論を語り合ったこともあり。深志でフランス語を学んだことは、世界に目を向けるきっかけで、僕の原点の一つです。

大学の専攻は中国語を選びました。高校1年の夏、父の経営する薬局が倒産し、家屋敷を金融業者に渡すことに。社会の裏表をすっきり見てしまい、社会に対する批判が強まった。一方、中国の革命が

が始まり、単身で北京まで行くことになったんです。熱狂的な毛沢東崇拜と政治一色の世界。現場を見たことは、僕の中国観を再確認させてくれました。それが研究者としての出発でした。

こうして学問への道をひた走ることになったのは、幼い頃からの教育の積み重ねのおかげ。信濃教育にはとても感謝しています。それだけに今の長野県の教育を見るとジレンマを感じます。学校現場では、教師は頻繁に代わってしま

う。県立短大をどうするかなど、やることはたくさんあります。

松本市の中町、蔵のある街並みに生まれ、源池小学校に通いました。学校から帰ると友達と一緒に四柱神社に行き、日が暮れるまで境内で野球をしたり、女鳥羽川で遊んだりしていました。

3年生で終戦。玉音放送を聴き、涙が止まりませんでした。小さい頃、捕虜が虐殺さ

れる映画を見たので、戦争に負けると日本もこうなるのかな、と子供心に恐ろしかったんです。6年生の時、学校に来た進駐軍の青年将校にクラス代表として質問したら、将校は編み上げ靴を机に投げ出して話しました。「ああ、戦争に負けただんな」と改めて感じました。

清水中学校は個性を伸ばしてくれた学校でした。社会科

の先生が生徒会活動やクラブ活動を全面的に支援し、民主主義とは何かを教えてくださいました。「心の奥の奥のそのまた奥の良心を大切にしないさい」という先生の言葉は、今も胸に刻まれています。

松本深志高校ではフランス語をとったので、「ゴローア協会」というクラブを作り、フランス文化を勉強しました。フランスの魅力を教えて

華々しく見えました。「これからは中国だ」と思った。松本から中国語を選んで大学に進む人は当時は全くなかったです。信念を持って選んで本当に良かった。逆境は決してマイナスイメージではなく、人生を切り開く契機になるんです。

1966年、東京外語大の教員になりました。その頃にちょうど、中国で文化大革命

また、長野県民は何か一つの信念を持ってまい進するということ。個性的な県民性を持っていると思えますが、最近は何人も人間も都市化してしまっただけで、大切に守ってきた「信州らしさ」をこれからは受け継いでほしい。徹底的に「ローカル」になることによってこそ「グローバル」になれるんですから。

(聞き手・写真とも落志朋代)